

登録コード	UAC68500	開講年度	2026				
授業題目	東洋史研究Ⅳ			担当教員	新津 健一郎		
				副担当			
単位数	2	講義期間	後期	曜日・時限	月曜・6時限		
				授業形態	講義		
信大コンピテンシー該当							
(1)授業の達成目標				授業で得られる「学位授与の方針」		⇔	【授業の達成目標】
2 6 UAカリ・総人社・人間文化学, 2 5 UAカリ・総人社・人間文化学							
【人間文化学】人間文化に関する文献・資料を収集・調査し分析・考察する人文学の伝統的な手法を身につけるとともに、他の学問分野の解析手法を併せて修得することによって、複雑多様化する現代社会の課題に柔軟な対応ができる応用力を有する。				⇔	近年の主要な学術的成果を題材として、歴史学における分析手法の実際の運用を理解し、各自の研究課題への応用可能性について検討することができるようになる。		
【人間文化学】高度な言語運用能力とコミュニケーション能力を基盤として、多領域のステークホルダーと協働し、現代社会の課題に取り組みながら、独創的かつ多文化共生的な英知の創成と提案を行う力を有する。				⇔	歴史学の研究史及び実際の研究手法を把握することにより、歴史学研究の社会的意義について具体的に考察できるようになる。		
【人間文化学】人間と社会を探究する学問分野間の総合的な知見を活かし、俯瞰的な視野で課題を捉える力を有する。				⇔	歴史学及び東洋史学分野の知識体系及び近年の研究動向を俯瞰し、各自の研究課題の学術的位置づけを具体的に述べるができるようになる。		
(2)授業の概要		日本における歴史学研究の展開（史学史）を把握しようとするとき、まず手に取るべき文献として『史学雑誌』「回顧と展望」がある。本授業では、過去の「回顧と展望」について、中国古代・中世史に相当する箇所を遡って読み込むことによって、各時期における研究動向及び主要な論点・研究成果を時系列的かつ系統的に把握することを目指す。 具体的には以下の通り授業を進行する。「回顧と展望」の現行区分に沿って、「中国古代・中世」を①春秋時代以前、②戦国・秦・漢、③三国南北朝、④隋・唐、⑤宋・五代の五期に分ける。授業では毎回10年分程度を扱うこととし（(3)授業計画欄参照）、参加者に報告担当を割り当てる。担当者は、割り当てられた時期・範囲の「回顧と展望」を読み込み、主要な成果（単著及び重要な雑誌論文等）の詳細な書誌・研究動向の推移について整理し、自身の問題意識や研究課題を踏まえた分析を加えて報告する。参加者は、報告された個々の研究における分析概念や問題設定の理解／報告された時期の研究動向とその変遷について、各々の担当範囲との比較を念頭に入れつつコメントを行い、報告者と討議を行う。さらに報告者は、学期末に担当した回の内容について討議を踏まえた研究史批評を作成し、提出する。					
(3)授業計画		第01回 ガイダンスと担当の割り振り 第02回 ①春秋時代以前 2020・2010年代 第03回 ①春秋時代以前 2000・1990年代 第04回 ②戦国・秦・漢 2020・2010年代 第05回 ②戦国・秦・漢 2010・2000年代 第06回 ②戦国・秦・漢 2000・1990年代 第07回 ③三国南北朝 2020・2010年代 第08回 ③三国南北朝 2010・2000年代 第09回 ③三国南北朝 2000・1990年代 第10回 ④隋・唐 2020・2010年代 第11回 ④隋・唐 2010・2000年代 第12回 ④隋・唐 2000・1990年代 第13回 ⑤宋・五代 2020・2010年代 第14回 ⑤宋・五代 2000・1990年代 第15回 総括（授業アンケート等も含む） ※期末試験は行わない					
(4)成績評価の方法		1) 担当した回に関する報告（40％） 2) 担当した回以外における討議への参加と貢献（20％） 3) 学期末レポート「研究史批評」（40％） 以上の材料を総合して評価する。					
(5)成績評価の基準		・ 所定の内容について、おおむね適切に整理して述べることであれば「合格水準にある」といえる。 ・ 所定の内容について、的確に整理して述べることであれば「やや上にある」といえる。 ・ 所定の内容について、的確に把握したうえで研究史及び論点の推移を総括的に述べることであれば「かなり上にある」といえる。 ・ 所定の内容について、的確に把握したうえで他の回の内容や自身の研究課題を踏まえた意義付けを述べることであれば「卓越している」といえる。					
(6)事前事後学習の内容		・ 担当範囲の「回顧と展望」を精読すること。割り当てられた節だけでなく、なるべく当該年の「〇〇年の歴史学界」全体に目を通しておくことが望まれる。 ・ 紹介された実証研究をある程度読み込み、議論の大枠を理解しておくこと。 ・ 担当回の報告と討議を踏まえて再度当該箇所の精読及び関連する実証研究の読み込みを行うこと。 ・ 以上を踏まえて批評レポートを作成すること。					
(7)履修上の注意		・ 報告担当者の欠席は厳禁。 ・ 報告の分担等については受講者の研究分野を考慮する。 ・ 報告担当以外の回でも、当該回で扱われる内容について十分に予習したうえで参加することが必要である。					

(8)質問,相談への対応	・電子メール（アドレスはeALPSまたは履修案内から確認することができる）により対応する。返信には時間を要することがあるので、余裕をもって連絡されたい。 ・面談（対面・遠隔いずれでも可）を希望する場合は電子メールでアポイントをとること。
【教科書】	・『史学雑誌』「回顧と展望」（資料室備え付けの冊子またはJ-stageに掲載されている電子版を利用することを推奨する）
【参考書】	・「回顧と展望」欄掲載の研究文献。 ・史学会編『日本歴史学界の回顧と展望』山川出版社、1987-88年。